

練習問題

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「学習のてびき」

本当のことを言えない春吉君の気持ちを読み取りましょう。

① いつもと同じ騒ぎが始まった。屁えきき虫の石太郎が屁を放ったときと、寸分違わぬことが。春吉君はどうしていいのかわからない。もう成り行きにまかすばかりだ。

やがて古手屋の遠助が、今日は大根菜屁だといった。なんと鋭敏な嗅覚だろう。確かに春吉君は、今朝大根菜のはいった味噌汁で食べて来たのである。

やがて騒ぎが大きくなり出した頃、藤井先生が例によって、誰だどと怒鳴られた。春吉君は意味もなく粘土をひねりながら、息を呑んで面を伏せた。みんなの視線が、ちようどいつも石太郎の上に蝟集するように、今日は自分に注がれているのだと思いつながら。今にどこからか、春吉君だという声が起こってくるに相違ないと思った。そういう風にすっかり観念していたので、石だ、石だ、という誤った声があがった時には、自分の頭上に落ちてくるはずの拳骨が、わきへ外れたように、ほっとした奇妙な感じになった。

顔をあげて見ると、意外にもみんなの視線は、春吉君に集中されておらず、やはり石太郎の方に向いているのだった。

藤井先生が、黒板の裏にかかっている鞭をとって、つかつかと石太郎の前へ歩いてゆかれる。春吉君の心の底から、正義感がむくつきと起きて来た。自分だと言ってしまおうか、しかし誰一人自分を疑ってはいないのである。ここで白状するのは何とも恥ずかしい。先生が石太

20

郎の席に達するまでの短い時間を、春吉君の中で正義感と羞恥心がめまぐるしい闘争をした。それが春吉君の動悸を、鼓膜にどきどきと響くほどはげしくした。そしてしばらく正義感が抑えられた。

反射的に粘土を、親指と人差し指の腹ですりつぶしながら、春吉君は見ていた。石太郎はいつもと変わらず、照れた顔を机に近く揺っている。今に、俺じゃないと弁解するかと、春吉君がひそかに恐れながらも期待していたのに、その期待も裏切られた。石太郎は鞭でこめかみをぐいと押され左へぐにやりとよろけたが、依然照れた様な表情で沈黙しているばかりである。

春吉君が余儀なく、自分の罪を白状させられる機会はいかに来なかった。これで騒ぎは済んでしまった。一同は再び作業に取りかかった。

(新美南吉『屁』)

30

- 注1 鋭敏なIIするどい。
- 注2 蝟集IIあつまること。
- 注3 観念IIあきらめること。かくごすること。
- 注4 羞恥心II恥ずかしいと思う気持ち。
- 注5 余儀なくIIやむをえず。

問一 線①「いつもと同じ騒ぎが始まった」とありますが、この

場合、だれが、どんなことをしたので、騒ぎが始まったのですか。

適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 石太郎が授業中におならをした。
- イ 友だちが授業中におならをした。
- ウ 春吉君が授業中におならをした。

工 藤井先生が怒鳴った。

問二 — 線②「誰だっ」とありますが、先生はどんなことをたずね

ているのですか。適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 騒いでるのは誰かということ

イ おならをしたのは誰かということ

ウ 笑っているのは誰かということ

エ 面を伏せているのは誰かということ

問三 — 線③「石だ、石だ、という誤った声があがった時」、春吉

君は、どんな気持ちでしたか。文中から十字で書きぬきなさい。

問四 — 線④「正義感と羞恥心がめまぐるしい闘争をした」とは、

どういうことですか。

問五 — 線⑤「正義感が抑えられた」とは、どういうことですか。

問六 — 線⑥「恐れながらも期待していた」春吉君の気持ちを説明

したものとして、適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 先生に鞭で打たれるのは恐ろしいけれど、正しい人間であり

たいと思った。

イ みんなの前ではじをかくのはいやだけれど、正しい人間であ

りたいと思った。

ウ 白状するのはいやなので、石太郎にだまっついてほしいと思

った。

エ 白状させられるのは恐ろしいけれど、先生のやさしさを信じ

たいと思った。

問七 — 線⑦「騒ぎは済んでしまった」けれど、春吉君は、どんな

気持ちでいると考えられますか。適当なものを次から選び、記号

で答えなさい。

ア 白状しなかったことを後かいている。

イ ばれなかったので安心している。

ウ 代わりにしかられた石太郎を軽べつしている。

エ みんなに疑われて恥ずかしいと思っている。

練習問題

1 次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

(詩の上の番号は行番号です。)

「学習のてびき」

情景を思いえがいて、作者がどんなことに感動しているのかを読み取りましよう。

自然に、充分自然に

伊東静雄

- 1 草むらに子供は跳く小鳥を見つけた。
 - 2 子供はのがしはしなかった。
 - 3 けれど何か瀕死に傷ついた小鳥の方でも
 - 4 はげしくその手の指に噛みついた。
 - 5 子供はハットその愛撫を裏切られて
 - 6 小鳥を力まかせに投げつけた。
 - 7 小鳥は奇妙につよく空を蹴り
 - 8 翻り 自然にかたえの枝をえらんだ。
 - 9 自然に？ 左様 充分自然に！
 - 10 —— やがて子供は見たのであった、
 - 11 礫のようにそれが地上に落ちるのを。
 - 12 そこに小鳥はらくらくと仰むけにね転んだ。
- 注1 瀕死 今にも死にそうなこと。
注2 愛撫 かわいがること。
注3 かたえ しば。

問一 —— 線①「子供はのがしはしなかった」を言いかえたものとして

適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 子供は草むらに下りた小鳥をつかまえた
イ 子供は飼っている小鳥と遊んでいた
ウ 子供は瀕死の小鳥を助けようとした
エ 子供は瀕死の小鳥をもてあそんでいた

問二 問一の子供の行動に対して、小鳥はどんな態度をとりましたか。

問三 —— 線②「力まかせに投げつけた」ときの子供の気持ちを述べ

たものとして適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 小鳥に裏切られた気がしてはらが立った。
イ 思ったとおり小鳥にげられくやしい。
ウ 心配に反して小鳥が元気でよかった。
エ 小鳥を飼えなくなって残念だ。

問四 —— 線③「奇妙につよく」とありますが、「奇妙に」と言っているのは、小鳥がどんな状態だったからですか。